

YMCAの願い

YMCA活動の一つである野外活動での出来事です。子どもたちはリーダーと一緒に飯盒炊飯をしていました。それが役割を分担し、まきを集め、かまどに木を積んで火をつけようと準備中でした。そしていよいよ飯盒に洗った米を入れて、かまどに乗せようとしている時、飯盒を持った子どもが急いだあまり、足を石に引っかけ転んでしまいました。これから炊けるのを心待ちにしていた自分たちのご飯が吹っ飛んでしまったのです。普通は誰しも落胆し、腹立たしく思い、その子どもを責めようとするものです。しかし、そのとき子どもたちは、転んだ子どもを中心に「痛い?」「大丈夫?」「リーダー早く来て」といった具合に、それぞれの役割を幼いながら一生懸命に担い、リーダーシップをとるのです。そして同時に「一緒に喜び悲しむ」ことを行っていました。転んで痛がっている友達のその痛みを共有する、その痛みを連帯するといったことをしていたのです。

ボランティア精神とリーダーシップを身につけること

指導者も先ず転んだ子どもの所に行って「これは痛いよな」と共感することで、痛みと不安の中にある子どもの心は安定し、転んだことも受け止めることができました。まず子どもの痛みを連帯し、共鳴してその痛みを感じる、そこからボランティア精神が始まっていくわけです。

YMCAの活動は、他者に対する思いやりと慈しみ、すなわち「隣人愛」の実践です。ボランティアは、個別的な活動です。しかしそれは、このような関係性によって成り立つのです。ヨハネによる福音書の13章に「イエスが弟子の足を洗い、イエスさまが関わりを持ってくださったから、お互いに足を洗うべきだ」と記されています。人と人との関わりにおいてボランティア活動があるのです。そして、その活動の中からそれぞれの役割を子どもたちは担い、ボランティア精神とリーダーシップが養われていくのではないのでしょうか。

「大阪YMCA クリスマス献金にご協力お願いいたします!」昨年末も、各地域にあるYMCA近くのターミナルで元気な声が上がりました。クリスマス献金街頭募金には、YMCAに集う様々な人が参加します。

大阪YMCAの学校に通う高校生、専門学校生、海外からの留学生も自発的に参加しています。最初は小さかった声も、自分の両親や祖母、同世代の若者たちが募金してくる姿を見ると、その声も次第に大きくなっていきます。それはきっと「自分と社会が繋がっている」と

家族、地域のひとりとして責任があること

「大阪YMCAの各学校では、参加型、体験型の学習を重視し、自分を大切に、みんなを大切に思う心を育てていくことを願っています。また、海外からの留学生には特に、日本での生活を通して、自国での生活を振り返り、家族、地域への感謝の心を忘れず、にいて欲しいと思います。」

私たちはともすれば自分ばかりで生きていると錯覚しがちです。本当は家族に守られ、地域の人々に支えられながら生きています。多くの学生、生徒がYMCAの地域活動を通して、自分は家族の一員であり、地域社会の一員であることを実感し、一緒に生きていくことの責任と楽しさを見つけて欲しいと願っています。

◆◆プログラム報告◆◆

エンジェルキャンプ

南YMCAでは、障がい者支援プログラムの一つとして、知的障がい児を対象にした『エンジェルスイミング』という水泳クラスを行っています。2月14日、そのクラスの前を対面したエンジェルキャンプを行いました。例年、暑さの残る初秋に行うのですが、今年度は『冬の自然の中でキャンプ体験を持つて欲しい』との思いから、今年度は冬に行いました。

場所は六甲山YMCAで、雪こそなかったものの、厳しい寒さの中でも、子どもたちは元気いっぱい、到着するなり六甲山YMCAに興味・反応を示し、探検をしていました。プログラムは、自然を楽しむポイントハイキングを行い、2日目のお餅つきは大好評で、皆で力を合わせて餅をつき、できたてのお餅の柔らかさと、その美味しさに皆感動していました。

水泳も含め、なかなか普段から体験できない活動をする機会が少なく、子どもたちにとって、このキャンプ体験はとても新鮮なものだったように感じました。小さな川のせせらぎに耳を傾けたり、木々に吊るしたハンモックに揺られたりと、子どもたちは思い思いに自然を楽しみ、キャンプを通して素晴らしい経験を積み重ねることができました。

エンジェルキャンプは、チャリティイーランやクリスマス献金など、様々な方のご支援から成り立つキャンプです。子どもたちにも貴重な体験の機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げます。今後とも、エンジェル水泳・キャンプを覚えていただき、ご協力いただければ幸いです。(吉田優介・南YMCAスタッフ)



ウェルネス事業

世界を小さくし、世界中の全てが繋がります。世界は小さくならず、世界中の全てが繋がります。世界は小さくならず、世界中の全てが繋がります。世界は小さくならず、世界中の全てが繋がります。

学校事業

「おはようございます!」と、元気に園児が登園してきます。子どもたちは、身の回りの準備を済ませると、思い思いの遊びを始めます。その中でも、今年ほど前から縄跳びが大流行しています。昨年の秋、子どもたちが寒い冬も元気に外で遊ぶ機会を多く設けようと、縄跳びを始めました。今では、子どもたち自身が試行錯誤し、跳び方を工夫して遊ぶようになってきました。先日も「先生、数えて!」「昨日、〇ちやんに数えてもらったとき、100回超えてん!」と、うれしそうに一人の子どもがやってきました。すると10人ほどの子どもも

国際事業

世界と地球を見つめ、考え、行動すること。世界と地球を見つめ、考え、行動すること。世界と地球を見つめ、考え、行動すること。世界と地球を見つめ、考え、行動すること。

社会福祉事業

「自分が認められ、受けとめられて、初めて自分の周りの子どもたちを肯定することができるようになるのです。」

このようにして安定した豊かな人間関係を築いていくことが、一人ひとりが互いに個性と個性を持っているという個性の個性を知り、10人いれば10人が全部違うという、一人ひとりが「違う」ということを理解していくのです。この「違い」の中から私たちは聖書にある「からだのたとえ」(コリントの信徒への手紙12章)のように一人ひとりは異なる役割を担い、一人でも欠けてはならないかけがえのない大切な存在であると言っていることを学び「神から与えられ、委ねられたいのちをお互いに大切に」、「自分のいのちとみんなのいのちを大切にすること」ができるようになるのではないのでしょうか。

幼稚園事業

「近寄つたら当てるから離れとかな!」「今日は、二人跳びに挑戦するねん!」「私、二重跳びにしよ!」「すごいな!二重跳びできるん!」と、それぞれが関わり合いながら、認めたり、尊重したりしながら自分の目標に向けて努力する姿が見られました。

私たちは、神様が人間を創造された時から、いつもそばにいる誰かと関わりを持ち、思いを伝え合い、協力して生きてきました。子どもたちは、先に述べたような日常の遊びを通して、互いに認め合い、協力していく力が備わっていくのです。私たちは、これからの子どもたちのそばにいつも寄り添い、そつと見守り、時には必要な手を差し伸べ、信頼のできる言葉をかけながら、一人ひとりのすこやかな心とからだを育んでいきたいと思っています。

自分のいのちとみんなのいのちを大切にすること

YMCA保育園では「丁寧な保育」を心に留めて保育をしています。丁寧な保育とは、乳幼児期に人間として豊かな環境に置かれ、自分の周りの人から愛されること、そして自分の人格を作り上げることができる「最善の環境」を整えるということです。

例えば保育者が言葉をかける時、「子どもと心をつなぐ」という気持ちで、「言葉のばら撒きをしないで」、「発達に合った言葉を選び」、「一人ひとりに近づいて話すこと」を心がけ、「言葉を手渡す」ようにしています。また、一人ひとりの子どもをそばに寄り添い、子どもたちを受けとめ、認めていくことにより、自分自身が受け入れられ、肯定されていることを感じることができるようになります。

すこやかな心とからだを育むこと

「おはようございます!」と、元気に園児が登園してきます。子どもたちは、身の回りの準備を済ませると、思い思いの遊びを始めます。その中でも、今年ほど前から縄跳びが大流行しています。昨年の秋、子どもたちが寒い冬も元気に外で遊ぶ機会を多く設けようと、縄跳びを始めました。今では、子どもたち自身が試行錯誤し、跳び方を工夫して遊ぶようになってきました。先日も「先生、数えて!」「昨日、〇ちやんに数えてもらったとき、100回超えてん!」と、うれしそうに一人の子どもがやってきました。すると10人ほどの子どもも

大阪キリスト教連合会・南YMCA共催 キリスト教オープンセミナー

2月14日、Yで、日々の出来事、教会でのことを織り込みながら、お話いただきました。地域社会の弱体化や精神障がいを抱えながら生きる人々への社会的支援体制の乏しさなどの悪条件の中、障がいをもつ人々の地域に密着した取り組みを通して、多くの社会の課題に直面するキリスト教会や私たちYMCAが、今後の歩みを考える上で重要な手掛かりをいただいたのではないかと感じています。

132名という多くの参加者と本キリスト教団浦河教会役員」と精神障がいをもつ当事者を迎え、病氣とうまく向き合いながら地域とともに暮らす。【貝谷容子・南YMCAキリスト教委員】

国際リレーエッセイ⑦

風の人、土の人

～ミャンマーより～

とき夫さん 奥田さん

2007年9月18日

ミャンマー・ヤンゴン

では、燃料の値上げを背景とした仏教僧による大規模な反政府デモが行われ、参加者は数日ものうちに数万人の規模に膨れ上がりました。それに対し軍事政権は武力による弾圧を行い、日本人ジャーナリスト長井健司氏を含め、多数の死傷者を出しました。2008年5月4日ヤンゴン・エーヤワディー管区へ大型サイクロンが上陸し、15万人の死傷者、行方不明者を出したことは記憶に新しいことです。またヤンゴン市内で爆弾が爆発する事件が2008年度には5回発生しています。

今同回直前にタイ・バンコク(スワンナプーリー)空港の封鎖が9日間続き、航空便の欠航もあつたりですが、メンバーが苦心して日程変更し、出発予定日を1日前倒しにすることにより、前日にチケットが入手できるとの連絡が入り、急遽出発準備を整えました。

決して安全な地域とは言えませんが、そこに支援を待っている人々がいるなら必ず実行する、果敢な「なかのしまワイズメンスクラブ」の面々がいるのです。サウス、豊中、土佐堀の各ワイズからも1名参加し、総勢8名の「支援品お届けツアー」となりました。

マンダレーでは生まれて初めてのキャロリングに同行し、22カ所の個人住宅や商店、ホテルなどへ聖歌を届けました。マンダレーYMCAとHITOセンターが共催し、学生やボランティアで構成されたパーティーで、深夜の家々へ聖歌を届けられたことに感動を覚えています。

ナガチャー子孤児院(写真下)では、男子ばかりで女子が1人も写っていません。それは、女子はかわいがられ養女となり、働き手となるのですが、男子はかわいがられないことが主な原因です。その延長線上でも考えられるLattic(人身売買)があり、愕然としました。「女性自立のための支援」「子どもの教育支援」をさらに推進させるためには、多くの方々の支援無しではできません。国際協力に少しでも関心を持っていただけたら嬉しいです。

◆◆筆者紹介◆◆

奥田 時夫さん
大阪YMCA常議員
昨年末ワイズメンスクラブのメンバーとしてもミャンマーを訪問。